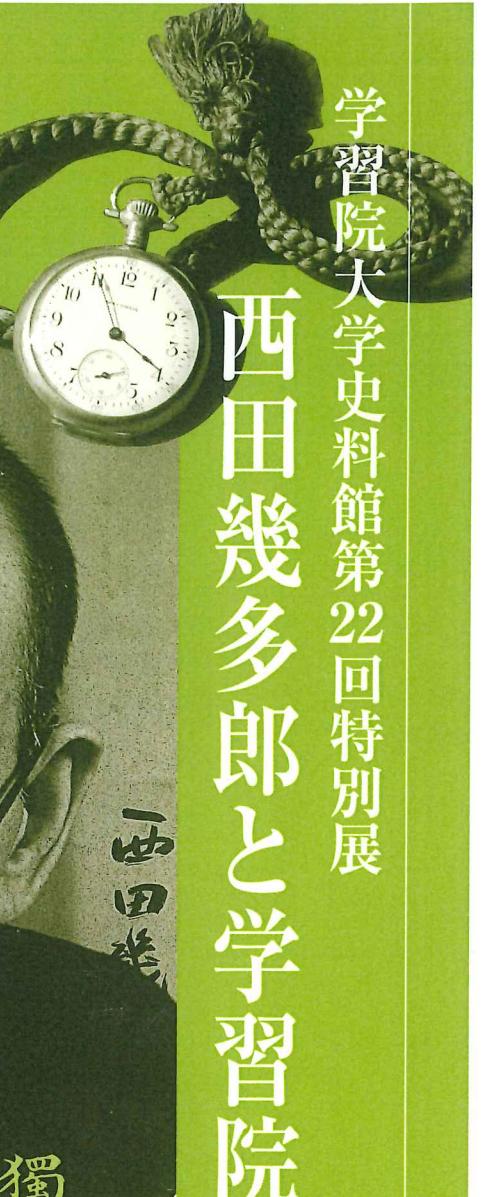


学習院大学史料館第22回特別展

西田幾多郎と学習院

学習院教授西田幾多郎



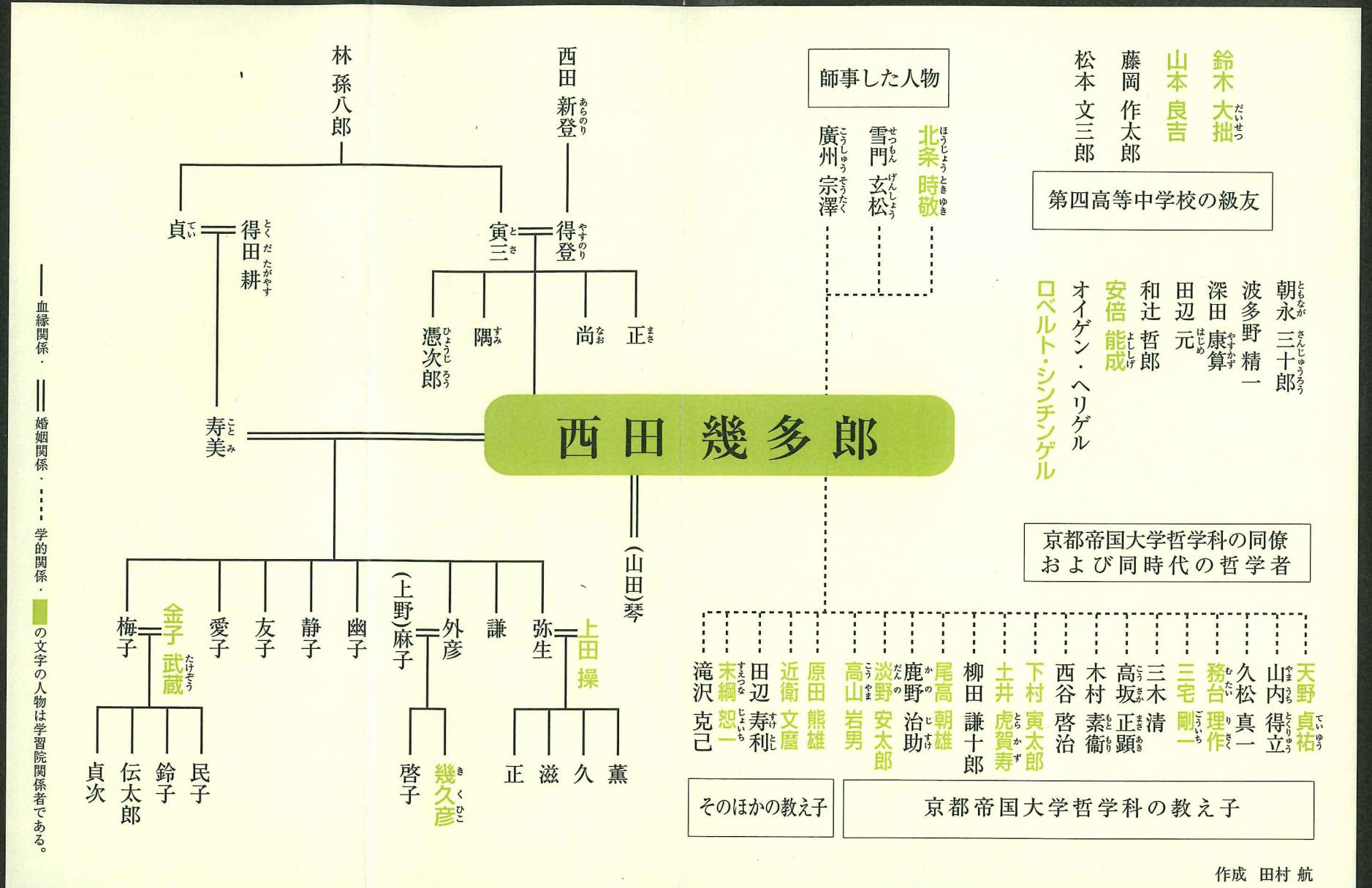
■学習院寸心荘入口と記念碑
(石碑の文字は下村寅太郎による)



第22回特別展 西田幾多郎と学習院	
会期	2002年6月7日(金)～7月20日(土)
編集・発行	学習院大学史料館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 TEL.03-3986-0221
発行年月日	2002年6月
印刷	技秀堂

会期 2002年6月7日(金)～7月20日(土) (日曜休み)
時間 12:00～16:30 (月～金曜日)
10:00～12:00 (土曜日)
会場 学習院大学 史料館展示室 (北2号館1階)

学習院大学史料館



■本展の開催にあたり、次の方々にご協力いただきました。

深く感謝の意を表します。

石崎宏平 上田 薫 加藤篤子
加藤耕義 加藤朋子 栗林啓子
高坂節三 島雄 元 下村克郎
杉山経子 竹田篤司 西田幾久彦
西村 弘 伴 勝代 松丸壽雄
三宅正樹 柳田節子 (50音順 敬称略)

石川近代文学館

石川県西田幾多郎記念哲学館

岩波書店

小田原市立図書館

京都大学文学部

新宿区教育委員会

創文社

東北大学文学部

東北大学史料館

獨協大学天野貞祐記念室

松ヶ岡文庫

担当部分

長佐古美奈子	I・II
酒井 潔	III・IV
岡野 浩	V
田村 航	略年譜・関係図

はじめに

日本を代表する哲学者の西田幾多郎は、明治43年(1910)～昭和3年(1928)まで18年間京都帝国大学で教鞭をとつたことから、京都という土地での研究や教育活動をもって知られている。

しかし、これに比べて、つぎの諸点は従来あまり注目されてこなかった。

第一に、西田が独文教授として旧制学習院に勤め、そのときの教え子で京都帝国大学に進学したものも少なくなかったこと。

第二に、定年退職後、西田は鎌倉に住居を得て、次第に鎌倉で過ごすようになっていったこと。そして鎌倉では旧友鈴木大拙や多くの弟子たちとも交友を深め、そのなかで精力的に執筆にいそしんだこと。

第三に、西田の弟子たちの多くが、強い気概をもって戦後の新制学習院大学で教えたこと。

また、これらの経緯もあって鎌倉の遺宅が、西田と夫人の没後、遺族によって学習院に寄贈され、「学習院西田幾多郎博士記念館(寸心荘)」として、教職員の研究会などに活用されていることもあまり知られていない。

そこで、本展示では、西田の生い立ちから晩年まで、その一生の足跡をたどるが、なかでも旧制学習院時代、そして鎌倉・姥ヶ谷時代の西田に注目する。

西田哲学を理解するうえでの新視点を示す試みとして、今回の展示を受けとめていただきたいと思う。

I 生い立ちから四高教授まで

西田幾多郎は明治3年(1870)5月19日、石川県河北郡宇ノ氣村(現在の宇ノ氣町)の十村(大庄屋のこと)西田家の長男として生まれた。幼い頃より成績優秀で、新化小学校卒業後は金沢へ出て石川県専門学校へ入学した。この入学のための家庭教師が、一生の恩師となる北条時敬であった。

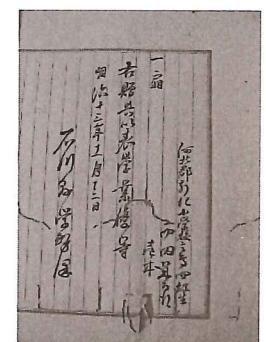
その後、同20年、同校は官立の第四高等中学校(四高)となり、西田はここで鈴木貞太郎(大拙)、金田(山本)良吉、藤岡作太郎らと友情を育んだ。しかし、同校の教育方針に反発し、同23年に中退した。そのために西田は、帝国大学(現在の東京大学)の本科へ進学できずに、選科へ入学することとなった。

同27年に選科を修了した西田は石川県尋常中学校七尾分校教諭、四高嘱託講師、旧制山口高等学校教授を歴任した後、同32年恩師北条時敬が校長となった四高へ教授として着任した。

この頃より参禅に励み、また『善の研究』のもととなる「倫理学史」などの執筆を始めている。



■ベントン氏送別写真
(左より西田、金田、藤岡、ベントン)
(明治24年 資料番号E-13)



■学業優等につき扇1本を贈与された際の目録
(明治13年 資料番号E-54)

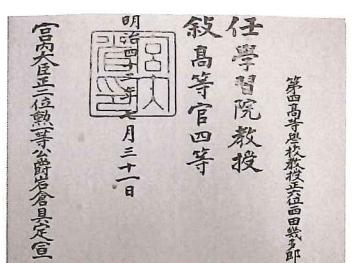
II 学習院教授として

明治42年(1909)夏、西田は学習院に独文主任教授として着任した。四高校長との確執に加え東京に出て学問研究上の便宜を得たいとの思いも強く、恩師北条時敬などに相談した結果であった。

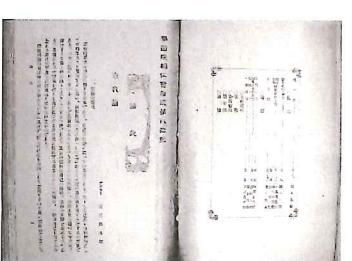
西田の学習院着任と同じ年に、鈴木貞太郎(大拙)も学習院教授となっている。ちなみにこの年は学習院にとつても、四谷より白羽に校地を移転し、新キャンパスを建設した記念すべき年であった。

西田は学習院在職のわずか1年の間に『学習院輔仁会雑誌』に「宗教論」を寄稿し、これが後に『善の研究』を形づくるに至った。また、西田が学習院を去るにあたって学生有志により「西田先生の本院を去らるゝを惜む」とも同誌に寄せられた。

西田が京都帝国大学に移った後も学習院出身の近衛文麿、木戸幸一、原田熊雄、上田操等が京都帝国大学に入学し、また、恩師北条時敬が学習院長、旧友山本良吉が学習院教授として在職したり、学習院との縁は浅からぬものがあった。



■学習院教授辞令
(明治42年 石川県西田幾多郎記念哲学館所蔵)



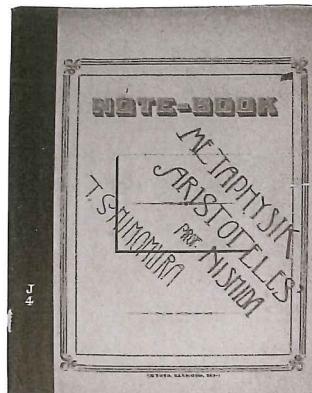
■宗教論一学習院輔仁會雑誌第八拾號
(明治43年 学習院大学図書館所蔵)

III 京都帝国大学教授時代

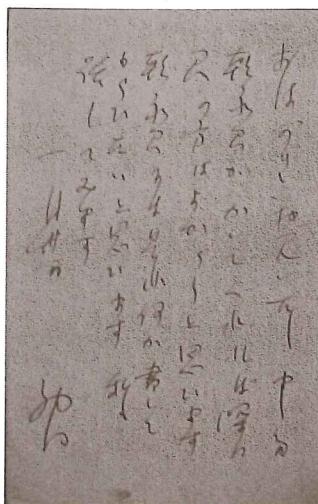
明治43年(1910)8月31日、学習院教授だった西田に、京都帝国大学文科大学助教授の辞令がおりた。大正2年(1913)8月教授に任命され、宗教学講座を担任、翌3年には哲学哲学史第一講座担任となった。以来、昭和3年(1928)8月定年までの18年間にわたり京都の地で、後に西田哲学と呼ばれる独自の思想形成にむけて、粉骨碎身の日々が重ねられていったのである。

『善の研究』(弘道館、明治44年)の出版以後、全国から哲学を志す学生が京都に集まるようになる。西田は、さらに「純粹経験」とその反省の可能性をめぐる「悪戦苦闘のドキュメント」を哲学科機関誌『哲学研究』に次々と発表し、大正6年(1917)『自覚における直観と反省』として岩波書店より出版する。

講義(哲学概論、特殊講義)では西田は、哲学の最も根源的な問題を扱うとともに、ヨーロッパ学界の最新動向を紹介し、批評した。西田の講義ぶりは、学生たちに思索の厳しさと共に人間的な温かみを感じさせた。また演習ではドイツ観念論、ベルクソン、ライプニッツなど西洋哲学の古典を原書で講読し、大学における哲学研究の方法を確立するとともに、多くの後進を育てた。卒業年次順でみると、山内得立、務台理作、三宅剛一、三木 清、木村素衛、高坂正顕、西谷啓治、下村寅太郎等がいる。また同僚にも恵まれ、朝永三十郎、波多野精一に加え、田辺 元、和辻哲郎、天野貞祐等が続き、哲学科は活況を呈した。



■下村寅太郎が西田の講義を受けた際のノート
(下村克郎氏所蔵)



■哲学研究編集に関する
西田から高坂正顕宛書簡
(大正13年 資料番号B-151)

IV 新制学習院大学と西田の弟子たち

昭和24年(1949)新制学習院大学の創立に尽力し、教育者・哲学者として知られる安倍能成もまた西田とのつながりは深い。安倍は旧制第一高等学校から東京帝国大学哲学科に進み、カント哲学を研究し、また夏目漱石にも師事した。京城帝国大学教授、第一高等学校長を経て、昭和21年(1946)文部大臣になり、広い人脈をもつ。西田とは、その直接の門下生ではなかったが、親友だった岩波茂雄を通じて知り合いとなる。また同世代の一高同窓生には天野貞祐、九鬼周造、田辺 元、和辻哲郎等がいた。

安倍は、学習院大学創立のための教授陣の編成・人選について天野等に相談した。哲学科には開学時から天野貞祐、下村寅太郎が兼任教授として参加、東大でも京大でもない、学習院哲学創生の気概に学生も教員も燃えた。その後、西田の京都での教え子であった三宅剛一、下村寅太郎が専任教員となり、両者とも日本哲学会委員長を務めるなど、学界の指導的役割をはたした。また、土井虎賀寿や淡野安太郎も在任した。このように新制学習院大学の哲学科と、西田門下のネットワークとの関係は深く、多方面に及んでいる。

また哲学科の自由で真摯な雰囲気と原典に基づいた厳正な研究方法も、直接にはそのつど教員の努力によるものではあるとはいえ、しかし間接的には、西田が弟子等に示していた研究態度に通じているのではないだろうか。

■安倍能成
(学習院院史
資料室所蔵)



■天野貞祐
(獨協大学天野
貞祐記念室所蔵)



■三宅剛一
(三宅正樹氏所蔵)



■下村寅太郎
(島雄元氏所蔵)

V 西田幾多郎の鎌倉の家



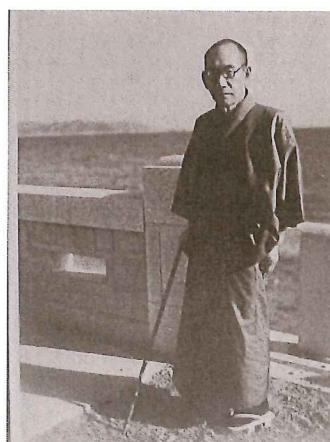
■鎌倉姥ヶ谷宅
(寸心荘)二階書斎

京都帝国大学を定年退職する頃から、気候温暖で東京にも近い湘南地方に移り住みたいと考えるようになっていた西田は、昭和3年(1928)の冬には鎌倉町乱橋材木座368番地に仮寓を得て、以来毎年冬と夏とを鎌倉で過ごすこととなる。

西田にとって鎌倉は、何か「無限なるもの」の動いている海と、三方を取り囲むように連なる山々との豊かな自然に加えて、その歴史的風土においても、強く心引かれる地であった。また、鎌倉に暮らす鈴木大拙など、知友との交流が可能であることも、西田がこの地を選んだ大きな理由であろう。その後市内各所に滞在場所を求めた西田が、近衛文麿、岩波茂雄らのはからいで極楽寺村姥ヶ

谷547番地の家(現在の「学習院西田幾多郎博士記念館(寸心荘)」)を得たのは、昭和8年7月のことである。

稲村ガ崎の古戦場近く、谷戸奥の高台に位置し、二階書斎からは相模湾を望む、この「鎌倉の家」での西田の暮らしは、厳しき中にもどこか伸びやかで、ゆったりしたものであったようである。若干の例外を除き毎年1月には鎌倉に移り、4月上旬には京都へ戻り、また7月には鎌倉へ移り、10月上旬には京都へ戻るという暮らしを10年余り続ける中で、西田は『哲学の根本問題』をはじめ多くの著作を世に出していく。この「鎌倉の家」で、西田が琴夫人と六女の梅子のみに見守られてその75年に渡る生涯を閉じたのは、昭和20年(1945)6月7日のことである。



■鎌倉の海を散策する西田
(上田薰氏所蔵)